



# NEWS LETTER

March 2019 Number.

9

## ご挨拶

### 演劇映像学連携研究拠点 岡室 美奈子

演劇博物館が運営する演劇映像学連携研究拠点は、文部科学省より2009年に認定を受けた共同利用・共同研究拠点です。2014年の再認定以降は5つの共同研究チームが当館所蔵の未発表資料に基づく共同研究を行っており、今年度は新たな4つのチームが研究に着手した年となりました。また、2016年度から文部科学省より「特色ある共同研究拠点の整備の推進事業 機能強化支援」の補助金を得て進めてきた事業は集大成の年を迎え、充実した成果を収めることができました。

共同研究事業では本年度も1件のテーマ研究、4件の公募研究が進められ、様々な研究成果が蓄積・発表されました。テーマ研究の「坪内逍遙・坪内土行資料の基礎的調査研究」は着実に膨大な資料の調査・考証を進めて成果発表を行いました。新たに発足した4つの公募研究チームもまた、精力的に各対象資料を研究し、早くも活発に研究発表を行いました。公募研究「栗原重一旧蔵楽譜を中心とした楽士・楽団研究」、公募研究「戦後日本映画における撮影所システムの変遷とその実態」、公募研究「マルチマテリアルを基礎とした立正活映作品の復元」、公募研究「描かれた中国演劇と大正期日本」は、それぞれが資料の考証を進めるとともに、その資料に合わせた多角的な検討を試み、関連する研究者や演者、演奏家等と協働し、演劇研究・映像研究の新たな成果を世に問うことができました。



(右より) ロビン・メイソン教授(バーミンガム大学副学長)、

野村萬斎氏、田中愛治総長、岡室美奈子館長

Robin Mason, Pro-Vice-Chancellor (University of Birmingham);

Mansai Nomura; President Aiji Tanaka;

Museum Director Minako Okamuro (right to left)

2018年度が最終年度となった「機能強化支援事業」では、これまでも4つの事業(1. 海外大学との連携と人材育成、2. 「くずし字OCR」を活用した総合的古典籍データベースの構築、3. 歌舞伎・人形浄瑠璃関係雑誌のデジタルアーカイブの構築、4. 演劇映像関連資料のデジタル化と共有化)を進めてきましたが、今年度はこれまでにない規模で海外の研究機関との連携と人材育成を進め、資料のデジタル化による様々な展開を行うことができました。まず、海外の研究機関との連携では、英国のバーミンガム大学シェイクスピア研究所、米国のカリフォルニア大学ロサンゼルス校、韓国の韓国映像資料院などの海外の著名な研究機関と演劇・映画に関する様々な国際シンポジウムを開催し、今後のさらなる共同研究の基礎を作ることができました。また、2018年度には新たな資料のデジタル化を進めると同時に、その文化資源としての可能性を広げる事業も多面的に行いました。古典芸能関連の古典籍資料を対象に「くずし字OCR」の技術を応用した事業では、既に公開したデータに付加的な情報を重層的に蓄積させることで、データベースをより総合的なものにしました。さらに、昨年度までにデジタル化した当館所蔵のサイレントフィルムについては、俳優の室井滋氏らにご協力いただき、あらためて音声をつけ直し、機会を設けてこれを公開する試みを行いました。

当拠点は今後も、演劇博物館の豊かな研究資源を活かすとともに、海外の研究機関との国際的な共同研究活動を進め、共同研究の拠点として活動してまいりたいと考えています。今後もみなさまのご支援とご協力を賜りますよう心からお願いいたします。

## contents

■ 拠点代表あいさつ	1 p
■ 特色ある共同研究拠点の整備推進事業 機能強化支援	2 p
■ 平成30(2018)年度 共同研究活動報告	6 p
■ 平成30(2018)年度 テーマ研究成果報告	8 p
■ 平成30(2018)年度 公募研究成果報告	9 p
■ Mission and Vision	13 p
■ Report on support projects for enhancing function, fiscal 2018	14 p
■ Report on the activities of the joint research teams, fiscal 2018	18 p
■ Report on principal research findings, fiscal 2018	20 p
■ Report on selected research findings, fiscal 2018	21 p

## 特色ある共同研究拠点の整備推進事業 機能強化支援

文部科学省の機能強化支援を受けて2016年度に始まった本事業では、海外大学との連携・人材育成と資料のデジタル化による研究環境の整備とを進めることで国内外の演劇・映像研究の発展に寄与することを狙い、以下の4種の事業を進めてきました。

### ■ 海外大学との連携と人材育成 ■

海外の研究機関との連携により人材交流・若手育成を図る本事業では、2018年度はこれまで以上に多くの国々の研究機関と連携し、アメリカ、ヨーロッパ、東アジアで共同研究・研究発信を行った。

#### ○国際シンポジウム「現代のシェイクスピアの翻案と上演をめぐる」

演劇博物館が2016年度から継続している世界的なシェイクスピア研究の拠点であるバーミンガム大学附属シェイクスピア研究所との連携事業の一環として、国際シンポジウム「現代のシェイクスピアの翻案と上演をめぐる」(11月26日、小野記念講堂)を開催した。

第1部では、日英4名の登壇者がシェイクスピアのアダプテーション(翻案)をめぐる講演を行った。まず、日本を代表する狂言役者の一人である野村萬斎氏が、自身の関わった3つのシェイクスピアの翻案作品において、面の使用をふくむ能や狂言の様々な要素がいかにしてシェイクスピアの翻案作品に活用されたのかを説明した。次にティファニー・スターン氏(バーミンガム大学シェイクスピア研究所教授)は、シェイクスピア時代の英国では連日異なる演目が上演されていた実態から、そこでのシェイクスピアのテキストの特徴を考察した。俳優・演出家のアンガス・ジャクソン氏(ロイヤル・シェイクスピア・カンパニー)は現代の英国における演出の例として、古代ローマを舞台とした4つのシェイクスピア作品をシリーズとして演出した自身の経験を取り上げ、時代設定の推移のなかで政治・国家・社会が変容する様子を提示したと説明した。最後に俳優・演出家のケリー・ハンター氏(フルート・シアター芸術監督)は、障害をもった子供たちを対象としたワークショップでシェイクスピアのテキストを取り上げていること、またその経験が新たな演出の糸口になっていることを紹介し、社会教育的な実践をふくめた現代の演劇実践を説明した。

第2部では、野村氏とケリー氏によって『マクベス』第1幕第7場の日本語(野村氏)と英語(ケリー氏)による朗読が行われ、来場者からの喝采を集めた。最後にマイケル・ドブソン氏(バーミンガム大学シェイクスピア研究所所長)を司会としてディスカッションを行った。この議論によって日英のシェイクスピア演出や演劇文化における様々な共通点が浮かび上がり、国際的な共同研究を行うことの意義が再認識された。



ケリーハンター氏と野村萬斎氏の朗読風景  
Reading by Mansai Nomura and Kelly Hunter

#### ○国際シンポジウム「イデオロギーと興行のあいだ 植民地／帝国の映画館、映画文化」

また、昨年度の共同研究課題の成果発信を海外へと推し進める一環として、韓国映像資料院の主催、神戸学院大学人文学部研究推進費と本拠点の共催による国際シンポジウム「イデオロギーと興行のあいだ 植民地／帝国の映画館、映画文化」(11月3日、韓国映像資料院)を開催した。これは近年注目を集めつつある東アジアにおける映画興行の国際的な展開を歴史的に探求する画期的な催しとして位置づけられる。共同研究課題の成果発信として、上田学氏(神戸学院大学准教授)が「満洲国」の映画館と巡回映写をめぐる講演を行い、分担者の近藤和都氏(日本学術振興会特別研究員PD)は、戦時下の日本の映画館をとりまく興行実践を検証した。仁井田千絵氏(早稲田大学)は、関東



韓国での国際シンポジウムの様子  
The international symposium in South Korea

大震災後の日本の映画館における近代化をめぐる諸実践を考察し、さらに板倉史明氏（神戸大学教授）は、日本の内務省による朝鮮映画検閲について検討した。研究協力者のチョン・ジョンファ氏（韓国映像資料院）は、1930年代半ば～1940年代初期の京城における映画館をもとに研究発表を行い、分担者のローランド・ドメーニグ氏（明治学院大学教授）が戦時下の映画興行・政策に関するディスカッションを務めた。最後には、その他3名の発表者と5名のディスカッションとともに、日韓の研究者による活発な議論が交わされた。日本の帝国主義の動きのなかでの日韓両国の映画興行について多角的な検討がなされた。

### ○歌舞伎訪露90周年「ウラジオストクにおける歌舞伎訪ソ90周年」の開催

7月末には協力事業として、2018年の歌舞伎訪露90周年を記念した「ウラジオストクにおける歌舞伎訪ソ90周年」が開催された。市川左團次・市川蔦之助氏の実演・ワークショップや小鹿野町子供歌舞伎の公演が行われるなか、日置貴之氏（白百合女子大学准教授）が演劇博物館所蔵の「歌舞伎ソヴィエト公演貼込帳」の資料紹介を交えた講演を行い、当館が保管するかつての日露の文化交流の資料が現代の新たな文化交流に開かれることとなった。これに関連し、ロシア国営の放送局より取材を受けるなど、当拠点は



ウラジオストクでの日置氏による講演会  
Lecture by Hioki in Vladivostok

広く歌舞伎などの日本の演劇文化の国際的発信拠点としての役割を果たしている。

### ○カリフォルニア大学ロサンゼルス校でのシンポジウム「Talking Silents」と映画上映会「The Art of the Benshi」

2019年3月1日～3日には本拠点の協力事業として、カリフォルニア大学ロサンゼルス校で無声映画の弁士をめぐるシンポジウムと上映会が行われることになっている。UCLA側からの提案から始まったものながら、韓国のシンポジウムと同様、昨年度までの共同研究チームの活動により蓄積された知見や経験を踏まえて開催が可能となった。シンポジウムでは、デヴィッド・デッサー氏（イリノイ大学名誉教授）らとともに当館の児玉竜一副館長、笹川慶子氏（関西大学教授）、柴田および当拠点の若手研究者である、共同研究チームの白井史人氏（日本学術振興会特別研究員PD）、近藤和都氏等が登壇する。日米の第一線で活躍する研究者が集い、弁士を中心とする日本の映画文化が多面的に討議される予定である。

### ○若手研究者海外派遣事業

本年度も全国から若手研究者を広く公募し、海外での研究発表を促す事業を進めた。本年度は笠原真理子氏（東京大学大学院人文社会系研究科）に旅費の一部を助成した。

【報告：笠原真理子】報告者は、2018年12月1日（土）および2日（日）にウィーンで開かれた国際研究大会「Evil Women: Women and Evil」に参加し、研究発表「20世紀の映画におけるマノン・レスコーの人物像分析—マノン・レスコーの恋人、デ・グリュエの視点から」を行った。40名ほどの参加者には全テーブルへの出席が義務づけられており、各テーブルにおいて活発な議論がなされた。なお、報告者はウィーン国立歌劇場等にてオペラ演出およびマノン・レスコーの表象に関する資料収集・調査も実施した。

## ■「くずし字OCR」を活用した総合的古典籍データベースの構築■

本事業は、「くずし字OCR」技術を利用して演劇関係の古典籍（特に浄瑠璃丸本と歌舞伎番付）をめぐる新たな研究環境の構築を目指すものである。2018年度の大きな成果は、昨年度まで蓄積してきた研究成果に更なるデータを付加することにより、浄瑠璃丸本と歌舞伎番付それぞれの資料に即したデータベースの多機能化を図り、総合的な古典籍データベースのひとつのモデルを提示したことにある。

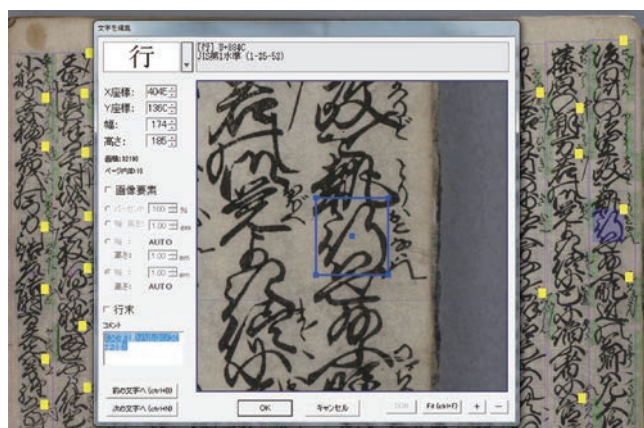
浄瑠璃丸本（「仮名手本忠臣蔵」と「義経千本桜」）については、これまで作成してきた翻刻データにくわえ、ルビ、捨て字、そして浄瑠璃の節回しを示す文字譜の情報を追加して表示するビューアの更新を図った。文字譜は浄瑠璃丸本の復刻出版に際して常に問題になってきた要素であるが、今回は初めてデータベースやウェブブラウザ上での表示を試みるため、田草川みずき氏（千葉大学准教授）に協力いた

だいて文字譜のデータ蓄積の方針、ウェブブラウザで表示するビューの表示方法を検討した。データ公開に際しては、早稲田大学の「文化資源データベース」上で文字譜専用のデータベースを作って、これと本拠点のウェブサイト上のビューと連携させるなど、将来的な丸本研究にも益するかたちで検索を可能にするモデルを模索した。

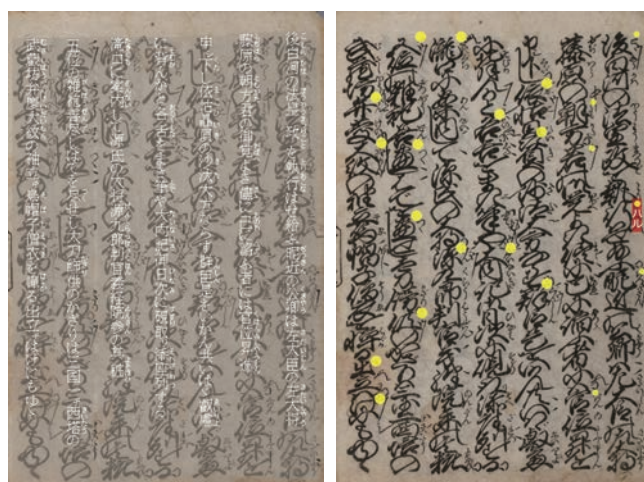
歌舞伎番付については新たに顔見世番付2件、役割番付2件のデータを作成するとともに、これまでは対象としていなかった家紋などのデータ化を進めた。この点は、画像をデータベース化することが可能となった、現代らしい番付の活用法といえよう。

これらのデータは、新たに更新したビューにより当拠点のウェブサイト上でオンライン公開するなど、デジタル公開の長所を活かした総合的データベースの可能性を具体的に示すものと位置づけられる。

2019年3月には楽劇学会でのパネルディスカッション「くずし字とデジタル化：演劇博物館における『くずし字判読支援研究』」で田草川みずき氏、大澤留次郎氏（凸版印刷株式会社）、柴田が登壇し、本事業での研究成果を報告する予定である。また3年間の事業の経過をまとめた「くずし字の符号化をめぐるガイドライン」を作成し、今後、国内外の研究施設で同様の試みがなされる際の基礎的な指針を提示する予定である。



文字譜入力画面  
Mojifu input screen



翻刻表示画面 (左: 全文・ルビ・捨て仮名、右: 文字譜)  
Digital transcription display screen  
(Left: full text/ruby characters/sutegana, right: mojifu)

## ■ 歌舞伎・人形浄瑠璃関係雑誌のデジタルアーカイブの構築 ■

本事業では、演劇博物館所蔵の豊かな演劇雑誌のデジタル閲覧環境を準備し、資料保存と閲覧便宜の向上を図ることを目指している。

2018年度には、演劇博物館所蔵の浅草オペラ関連雑誌『オペラ』35冊のデジタル化を行った。同雑誌は歌劇評、興行主や歌劇俳優への提言から、様々な通俗的な記事、読者投稿まで同時代的な浅草オペラをめぐる言説資料とし

て極めて貴重な資料である。現存数が限られており、同雑誌は他館でも所蔵が少ないが、紙質も悪いため、演劇博物館でも従来から現物の閲覧が困難であった。本事業のなかで、高精細のデジタル撮影を行うことにより、演劇博物館の和書閲覧室で広く閲覧に供することが可能となる。戦前期の演劇・音楽研究の活性化に寄与することが望まれる。

## ■ 演劇映像関連資料のデジタル化と共有化 ■

本事業では、新たに演劇博物館所蔵の演劇映像資料のデジタル化を進めるとともに、昨年度までにデジタル化した資料の利活用の幅を広げる複数の事業を行った。

### ○草創期テレビ台本のデジタル化

2016年度から継続的に取り組んできた「草創期テレビ台本のデジタル化」事業では、草創期のテレビで活躍した隣

接分野（文学・映画）関連の台本を中心にデジタル化を進めた。安部公房、寺山修司、小津安二郎、大島渚、羽仁進等を取り上げ、テレビが多様な表現者にとって重要な領域であったことを示した。デジタル化された台本は演劇博物館の和書閲覧室と常設展示の専用端末でも閲覧に供し、台本資料の意義を幅広く来館者に伝えている。



『ちえのわクラブ』上映時の様子  
Screening of *Chie no wa kurabu*



東家一太郎・美両氏による『乃木将軍』上映  
Screening of *Nogi Shogun* by the Azumayas

## ○映像資料のデジタル化

昨年度までにデジタル化した2種の映像資料の利活用の可能性を広げることを試みた。まず、演劇博物館を特集したテレビ番組『ちえのわクラブ』（TBS、1966年）を取り上げた。館蔵フィルムがオープニングの音楽以外の音声を欠いたものであったため、俳優の室井滋氏に依頼して放送台本をもとに1人5役で声をつけていただき、映画監督・TVディレクターの西原孝至氏に編集をしていただいた。この新しい音声映像は当館の90周年式典で披露され、来場者から大いに注目を集めた。

また、小沢昭一旧蔵資料から発見された映画作品『乃木将軍』（池田富保監督、1935年）のデジタル化を契機としてシンポジウムと映画上映会「日本映画と語り物の文化」（12月15日、小野記念講堂）を行った。発見されたフィルムが浪曲トーキーのサイレント編集版であったことに鑑み、弁士の片岡一郎氏とピアニストの神崎えり氏による上映と、浪曲師の東家一太郎氏と相三味線の東家美氏による上映の2種を試みた。また関連する演目として同名作品の映画琵琶台本『乃木将軍』（国立映画アーカイブ所蔵）が薩摩琵琶の川嶋信子氏により弾奏された。シンポジウムでは、柴田、真鍋昌賢氏（北九州市立大学教授）、小松弘氏（早稲田大学教授）により、映画史、浪曲史、音楽史など多角的に考察がなされた。さらに演劇・演芸評論家の矢野誠一氏に登壇いただき、児玉副館長を聞き手として、フィルムの旧蔵者小沢氏と浪曲・乃木物・演劇の関わりが語られた。当館所蔵のフィルムを機縁として、日本映画をとりまく語り物の文化の多様性の諸相に光を当てることができた。

## ○鶴田コレクションのデジタル化

さらに、鶴田嘉七郎氏旧蔵の893点にのぼる熊本の戦前映画資料「鶴田コレクション」のデジタル公開作業を進めた。これを機として、熊本大学教育学部、一般財団法人山鹿市地域振興公社と当拠点の共同主催により、熊本の芝居小屋である八千代座で映画上映とシンポジウム「八千代座に甦る無声映画たち」（9月1日）を開催した。上田学氏、神田由築氏（お茶の水女子大学教授）、児玉副館長、柴田が登壇し、江戸期の芝居文化から大正・昭和の新国劇、そして熊本の映画興行をめぐって活発に討議が行われた。

このほか、共同研究事業によって蓄積された膨大なデジタル画像の公開準備を進め、映画伴奏楽譜資料、戦前日本映画興行資料、中国演劇資料などの館内公開作業を完了した。当館の貴重な演劇・映像資料のデジタル公開が演劇・映画研究のさらなる活性化につながることが期待される。（柴田康太郎）



質疑応答の様子  
Question and answer session

平成30年度も各共同研究チームは精力的に成果発表を行いました。以下では各チームの代表的な催しを取り上げ、研究活動の一端を紹介します。

### テーマ研究1 坪内逍遙・坪内士行資料の基礎的調査研究

11月12日、本研究チームによる坪内逍遙・坪内士行関係の未整理資料の調査・研究の成果報告会が開催された。発表は研究分担者5名により行われた。

水田佳穂は、大正末年の士行旧蔵の講演腹案を報告するとともに、戯曲研究会の舞台写真を提示しつつ、士行が主張した新しい日本の演劇のあり方について考察した。松山薫は、逍遙宛池田大伍書簡7通の内容を読み解き、「逍遙日記」と対応させつつ、大伍の無名会時代の活動、劇談会、「名月八幡祭」創作過程と逍遙との関係などの具体的な考察を試みた。柳澤和子は、車人形東京公演を契機に生まれた逍遙と説経節の太夫である若松若太夫の関係を書簡によって辿るとともに、両

者の日記等によりその背景を考察した。濱口久仁子は、逍遙の遠縁にあたる名古屋の西川流舞踊家西川嘉義(織田嘉義)について、逍遙との関係、最期のいきさつ、追善舞踊会を取り上げ、また士行の妹織田志づの逍遙宛書簡を紹介した。最後に小島智章は、書簡や逍遙日記、回想録等から、石割松太郎と逍遙及び早大関係者との交流の様相を詳らかにするとともに、石割が人形浄瑠璃研究を始めた時期や動機について検討した。

本研究チームでは、坪内逍遙・坪内士行資料を整理・撮影し、それを基に研究を進めている。今回は様々な角度から研究の一端を公開することができ、有意義な成果発表会となった。

### 公募研究1 栗原重一旧蔵楽譜を中心とした楽士・楽団研究：昭和初期の演劇・映画と音楽

本研究チームは2019年1月30日に、榎本健一の楽団で活動していた栗原重一の旧蔵資料の調査に基づく公開研究会「エノケンの楽団と舞台・映画・レコード」を開催した。前半では、白井史人と山上揚平が楽譜資料の調査成果を報告し、さらに中野正昭によるエノケン喜劇のアダプテーションに関する研究発表、当拠点研究助手の柴田康太郎による浅草松竹座等での映画館の楽団とレビューに関する発表、さらに紙屋牧子による日本映画史におけるエノケン映画の意義を考察する研究発表が行われた。さらに武石みどりのコメントと登壇者のディスカッションを経て、音楽演奏や選曲の実態、および演劇・レビュー・映画などの多角的な榎本の活動との関わりが具体的に浮かび上がってきた。後半では、同時代のSPレコードに造詣の深い毛利真人によるSP音源の紹介と分析に続いて、サックス・クラリネット演奏家の

渡邊恭一氏が率いる7名の楽団が、栗原所蔵資料から選曲した楽曲の実演を行った。同時代の新しいレパートリーをいち早く取り入れた栗原が、厚みあるサックスが生み出す和声などの特徴でエノケンの活動を彩り支えていたことが体得された。楽譜資料のさらなる調査と同時代文献の考証の進展を促す意義深い研究会となった。



シンポジウムでの議論の様子  
Discussion at the Symposium

### 公募研究2 戦後日本映画における撮影所システムの変遷とその実態：日活ロマンポルノを中心とした実証的研究

2018年12月22日に、早稲田大学戸山キャンパスにて研究会「プレスシートから読み解く日活ロマンポルノ」を開催した。開会挨拶では碓井みちこが、プレスシートとは何か、また研究題目にもある撮影所システムとは何かという解説を交えて、チームのプロジェクトの概要、そして今回の研究会の開催趣旨を説明した。第一部では、木原圭翔が演劇博物館の所蔵するプレスシートの概要を、全体の枚数や年代別の分布等をグラフで示しながら紹介した。次いで鳩飼末緒は、『すげばん刑事

ダーティ・マリー』(1974年)を例に、プレスシートや、ポスター、新聞広告といった宣伝資料から何が明らかになるのかを示した。

第二部では、日活ロマンポルノの企画や宣伝の担当者であった成田尚哉氏と早乙女朋子氏をゲストに招き、藤井仁子と鳩飼が聞き手を務めて座談会を行った。成田氏には「天使のはらわた」シリーズや『ラブホテル』(1985年)といった企画担当の成立経緯を、早乙女氏には、プレスシートに記載するキャッチコピーやあら

すじをどのように作成し、完成したプレスシートをどのように宣伝に活用していたのかを、具体的なエピソードを交えてご説明いただいた。

ロマンポルノの配給や興行に関しては証言が少なく、実態は映画研究者の間でもあまり知られていない。プレスシートはそうした側面の解明に格好の資料であるにもかかわらず、これまで映画研究にほとんど活用されてこなかった。様々な角度からプレスシートへのアプローチを試みた本イベントは、新たな研究の出発点となるはずである。



公開研究会の様子  
The public conference

### 公募研究3 マルチマテリアルを基礎とした立正活映作品の復元

神戸映像アーカイブ実行委員会との共催企画として神戸発掘映画祭2018内のイベント「発掘と研究 宗教と映画」を開催した。そのなかで代表者の上田学は、共同研究課題の成果発信として『鍋かぶり日親』（1922年）と『釈迦の生涯』（1961年）の製作背景および現存フィルム

についての解説を、協力者のユリア・ブレニナが1920年代の日蓮主義および日親についての研究発表をおこない、あわせて両作品を上映した。『鍋かぶり日親』は失われたとされていた新発見の作品であり、イベントは好評のうちに終了した。

### 公募研究4 描かれた中国演劇と大正期日本：福地信世『支那の芝居スケッチ帖』を中心に

2018年10月23日、上海崑劇団と早稲田大学演劇博物館演劇映像学連携研究拠点主催による講座と上演「崑劇と日本の百年」が大隈記念講堂大講堂で行われた。

この催しは、来日する上海崑劇団の代表団から、これまで国内で実施してきた崑劇普及活動「崑劇走進校園」を早稲田大学で開催したい、という申し出があったのに対し、演劇博物館演劇映像学連携研究拠点と同拠点の共同研究チームが応じることで実現したものである。

来年2019年は、世界的に著名な中国の女形俳優梅蘭芳による最初の来日公演が行われた1919年から、ちょうど百年の節目の年となる。早稲田大学とも深い縁のある梅蘭芳はこのとき崑劇の演目を複数披露し、当時の人々は日本の舞台で初めて中国の崑劇を目にすることになった。今回の催しでは、この公演以来の崑劇と日本とのかわりを回顧すべく、上海崑劇団には特に梅蘭芳が来日時に演じた『玉簪記・琴挑』を上演してもらうことになった。

当日は開場前から多くの観衆が大隈記念講堂前で列を作り、最終的には600名を超える入場者があった。第一部では、研究代表者の平林宣和から「崑劇と日本の百年」というタイトルの意義を説く解説があり、続いて上海崑劇団の団長で、上海市の伝統芸能界を統括する上海戯曲芸術中心の総裁でもある谷好好氏より、崑劇および上海崑劇団に関する講演が行われた。

第二部では、まずコーディネーターを務めた陸海栄氏による演目解説があり、さら

に劇団に随行して来日した古琴奏者の楊致俊氏が日中の琴を通した交流の歴史を講じたのち、名高い「高山流水」の曲を披露した。

続いて崑劇三演目が上演された。最初の『扈家荘』と二番目の『虎囊彈・山亭』は、いずれも『水滸伝』に基づく芝居で、銭瑜婷氏による扈三娘の激しく流麗な立ち回りや、呉双氏演じる魯智深と酒売りのユーモラスな演技に、会場からは盛んに拍手喝采が送られた。続く三番目の『玉簪記・琴挑』では、主演の黎安・陳莉両氏が演じる書生と尼僧の琴を通した心の探り合いに、観衆は終始息を飲んで見入っていた。

最後に谷好好氏と演劇博物館の岡室美奈子館長の間で感謝状と記念品の交換があり、日中平和友好条約締結40周年、演劇博物館開館90周年、上海崑劇団建団40周年を祝う催しにふさわしく、和やかな雰囲気のもとに幕を閉じた。



平林氏による講演の様子  
The lecture by Hirabayashi



『琴挑』上演の様子  
Performance of "Qintiao"

## テーマ研究

# 1

## 坪内逍遙・坪内士行資料の基礎的調査研究

研究代表者：濱口久仁子（立教大学異文化コミュニケーション学部兼任講師）

研究分担者：菊池明（早稲田大学演劇博物館招聘研究員）、小島智章（武蔵野美術大学非常勤講師）、松山薫（早稲田大学教育・総合科学学術院非常勤講師）、水田佳穂（早稲田大学演劇博物館招聘研究員）、柳澤和子（早稲田大学教育・総合科学学術院非常勤講師）

### 【研究目的】

本研究では、未整理状態にある逍遙宛の書簡全点の目録化を完了させるとともに、『坪内逍遙書簡集』に関連する書簡を中心として、順次、翻刻公開する予定である。逍遙宛書簡の整理、翻刻・研究は、『坪内逍遙書簡集』収録の年代未詳書簡の年代推定や、往復書簡としての内容研究を可能にし、逍遙の活動や当時の背景、交流において新たな側面を明らかにするものと期待され、現在進行中の「逍遙日記」再校訂にも資するものと思われる。

また、本研究を機に調査に着手した士行資料は、近年その多彩な演劇活動への評価が高まっている人物の資料として公開が待たれており、原稿、台本、チラシ、書簡、写真から、戦前の新文芸協会や宝塚新劇団の計画、宝塚や東宝での新劇活動、戦後の日本舞踊の評論といった、近代日本演劇史・舞踊史における士行の業績がより具体的に明らかになるものと期待される。

### 【研究成果】

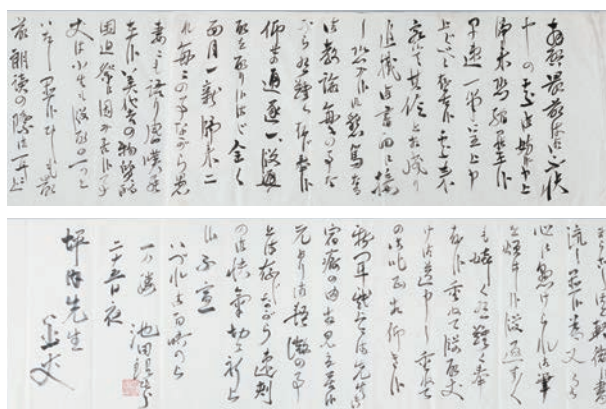
#### ○坪内逍遙資料

坪内逍遙宛未整理書簡と附属資料の整理及び仮目録作成作業を進め、逍遙旧蔵の演劇博物館設立関係資料、写真等計278件と、逍遙宛書簡貼込帖の内「八代六郎書簡集」等5冊306丁（収録書簡263通）をデジタル撮影した。翻刻は島村抱月・小川未明等50通を終えた。また書簡翻刻に基づく研究成果を報告する成果報告会（11月12日於6号館318教室）を行った。池田大伍の無名会時代の活動や「今様鳥虫歌」「名月八幡祭」執筆の経緯など逍遙との緊密な関係（松山「逍遙と池田大伍一大正中期の

逍遙宛池田大伍書簡をめぐる一」、西川嘉義の生涯と、縁戚関係にあった逍遙の引き立て（濱口「西川嘉義―舞踊活動と晩年の動向―」、若松若太夫のふくさ人形を介した大正13年の逍遙との交流（柳澤「若松若太夫が逍遙に宛てた大正十三年の書簡」）、逍遙と石割松太郎との関係及び石割の人形浄瑠璃研究（小島「石割松太郎と逍遙」）等が詳らかになった。内計35通に詳細な註を施して「演劇研究」42号に掲載する（松山・濱口・柳澤「〈坪内逍遙宛諸家書簡4〉坪内逍遙宛池田大伍・西川嘉義・織田志づ・若松若太夫書簡」）。

#### ○坪内士行資料

20箱のうち1箱分にあたる、未整理の自筆原稿類439点の仮目録を作成した。内39件は大正末期の講演腹案である。これまで資料的限界から顧みられることの少なかった、大正10年から13年の戯曲研究会および芸術協会、大正15年から昭和5年の宝塚国民座といった、士行の新劇活動がより明らかになった。講演では、新しい日本の演劇のあり方を説き、広く多数一般の人々が喜ぶ芝居としての国民劇を模索している。これについては当チームの成果報告会（11月12日於6号館318教室）にて報告（水田「坪内士行の講演記録―大正末年の新劇活動を中心に―」）を行った。



坪内逍遙宛池田大伍書簡 大正7年6月25日（「名月八幡祭」について）  
A letter from Daigo Ikeda to Shoyo Tsubouchi, June 25, 1918  
（“On Meigetsu hachiman matsuri”）



芸術協会公演チラシ、  
大正13年4月、於神戸聚楽館  
Geijutsu Kyokai performance  
flyer, April 1924, Kobe  
Shurakukan Theatre

公募研究は審査を経た研究計画に基づく複数の共同研究プロジェクトにより構成され、演劇博物館の収集品の有効利用を目指すものです。プロジェクトに対し、本拠点は共同研究の場と資料を提供します。下記のプロジェクト・メンバーの肩書および所属は本ニューズレター編集時のものであり、現在のものとは異なる場合があります。

## 公募研究

# 1

## 栗原重一旧蔵楽譜を中心とした楽士・楽団研究 ——昭和初期の演劇・映画と音楽

研究代表者：中野正昭（明治大学文学部兼任講師）

研究分担者：武石みどり（東京音楽大学音楽学部教授）、紙屋牧子（国立映画アーカイブ特定研究員）、白井史人（日本学術振興会特別研究員PD）、山上揚平（東京藝術大学音楽学部非常勤講師）、毛利真人（音楽評論家）

### 【研究目的】

栗原重一（1897-1983）は昭和初期にエノケン楽団、松竹キネマ演芸部、さらにトーキー初期のPCL映画製作所などで指揮者、編曲者として活躍した音楽家である。本研究はその旧蔵楽譜の一部である「エノケン楽団・栗原重一旧蔵楽譜（約500点）」の調査・分析を行う。楽譜資料の基礎調査を出発点に、同時代の文献や関連資料、関連楽譜コレクションの調査を組み合わせる研究を進める。さらに昭和初期の楽士・楽団の領域横断的な活動実態から、同時代の劇団や映画館における作品生成や興行のあり方を具体的に解明する。

### 【研究成果】

本年度は、栗原重一旧蔵楽譜の約500点の概要調査を完了し、昭和初期から戦後にかけて榎本健一の楽団で活動した栗原による輸入曲の収集と使用実態を克明にとどめる資料群であることが明らかとなった。

#### ○楽譜資料の仮目録の作成と調査・分析

旧蔵楽譜494点の目録を作成した。ジャズを中心とした輸入楽曲が大部分であり、印刷譜と手稿譜が混在している。印刷譜には出版情報が記載され販売元が明確な出版譜（約220点）と、販売や流通経路が不明の楽譜（約150点）に区分される。出版譜には楽曲名、作曲者、作詞者、編曲者、出版社などの情報、手稿譜（約80点）には使用五線紙の「ピエル・ブリヤント／榎本健一・一座」、「東宝管絃楽団」などの劇団・楽団名や「オ

グラ楽器店」などが記載され、栗原個人や浅草松竹座の所蔵印も確認された。これらの情報を目録へ採録し調査を進めた結果、本資料群は1930年代から戦後にかけて栗原が収集・使用した楽譜群を体系的に整理したもの的一部分である可能性が高いことが分かった。

#### ○楽譜資料の由来について

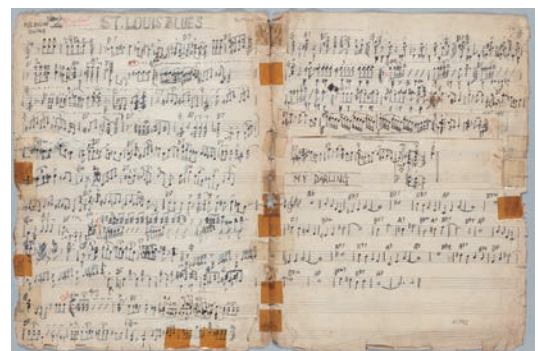
NHKテレビ番組「日本喜劇人伝（1）現代セミナー エノケンとその仲間たち」（1990年7月16日）等を調査した結果、この楽譜群は、栗原重一からジャズ評論家・瀬川昌久氏のもとに譲渡された旧蔵楽譜段ボール25箱分のうちの一部分であることが判明した。資料には4桁の手書きの番号でアルファベット順に整理された楽譜群が含まれている。4桁の番号には欠番も多く、今後のさらなる旧蔵資料の収集・調査を進める必要性がある。

#### ○映像・音源との比較と活用の試み

2018年8月20日に研究分担者の毛利が所蔵する栗原や榎本健一関連のSP音源を分析する研究会を開催した。また2019年1月30日の公開研究会では、共同研究者による調査概要の報告と、演劇・映画・レビューなど栗原が従事した榎本健一の活動に関する研究発表を含むシンポジウムを開催した。毛利による音源分析を踏まえてジャズ演奏家の渡邊恭一氏を中心とした参考演奏を行い、栗原が所蔵していた楽譜の楽曲の特徴を具体的に検討した。



A-Tisket A-Tasket（編曲：Jack Mason、ピアノ譜、2-4頁）  
A-Tisket A-Tasket (Arrangement: Jack Mason, piano part, pages 2-4)



St. Louis Blues（編曲者不明、手稿筆写譜）  
St. Louis Blues (Arranger unknown, hand-written part)

## 戦後日本映画における撮影所システムの変遷とその実態 ——日活ロマンポルノを中心とした実証的研究

研究代表者：碓井みちこ（関東学院大学国際文化学部准教授）

研究分担者：木原圭翔（東京大学大学院情報学環特任研究員）、河野真理江（立教大学非常勤講師）、嶋飼未緒（早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程）、藤井仁子（早稲田大学文学学術院教授）

### 【研究目的】

成人映画のプログラム・ピクチャーである日活ロマンポルノは、撮影所システムの最後の砦として、戦後日本映画史上きわめて重要な役割を果たした。本共同研究では、演劇博物館所蔵のロマンポルノのプレスシートの整理及び内容調査を通じて、ロマンポルノの時代を中心に、プログラム・ピクチャーの製作から興行までを手掛けた撮影所としての日活の歴史を多角的に考察する。また、配給や興行といった側面の実態解明に最適であるにもかかわらず、学術的に活用されてこなかったプレスシートを研究対象とすることで、新たな映画研究の方向性を提示することを目指す。

### 【研究成果】

映画作品の宣伝関連資料として、プレスシートの存在は比較的良好に知られており、近年では作品分析の補助手段として参照される例も少なくない。その一方で、プレスシートに記載されている情報の種類や詳細、あるいは実際の宣伝における活用方法など、プレスシートそれ自体については不明な点がいまだに多く、研究対象として十分な調査がなされてこなかった。そうした意味で、今回の調査は映画の製作・配給・興行のプロセス内でのプレスシートの位置付けや、映画研究における活用の可能性を提起するための基盤を構築するという意味で大きな意義を持つ。具体的な研究成果は主に以下の二点である。

○演劇博物館所蔵の日活ロマンポルノプレスシートの概要解明

未整理の状態にあった演劇博物館所蔵のロマンポルノのプレスシートを整理し、具体的な枚数（955枚）、サイズの違い（大小2種類）、年代別の枚数変化など、その概要が明らかにされた。また、資料的価値の高い大サイズについては全てデジタル化（1作品につき表と裏1カットずつ）を行った。こうした資料は将来的に館内端末によるデジタル公開などが期待される。

○公開研究会「プレスシートから読み解く日活ロマンポルノ」の開催

研究チームによる資料整理の報告とプレスシート活用のケーススタディとともに（第一部）、ロマンポルノの宣伝に携わっていた関係者2名（成田尚哉氏、早乙女朋子氏）を招き、座談会を行った（第二部）。これまでロマンポルノは往々にして、傑出した監督たちが生み出す「作品」として評価されてきた。しかし今回、プレスシートという資料に焦点を当てることで、ロマンポルノにおいても撮影所システムという枠組みの中で機能する「宣伝」がきわめて重要であったことがあらためて確認された。



『濡れた欲情 ひらけ! チューリップ』  
(神代辰巳監督、1975年)のプレスシートの表面  
Front of the press sheet for *Nureta yokujo: hirake! Churippu*  
(directed by Tatsumi Kumashiro, 1975)

公募研究

3

## マルチマテリアルを基礎とした立正活映作品の復元

研究代表者：上田学（神戸学院大学人文学部准教授）

研究分担者：スザンネ・シェアマン（明治大学法学部教授）、ローランド・ドメーニグ（明治学院大学文学部准教授）、板倉史明（神戸大学大学院国際文化学研究科准教授）、仁井田千絵（早稲田大学演劇博物館招聘研究員）、近藤和都（日本学術振興会特別研究員PD）

### 【研究目的】

本研究の目的は、早稲田大学演劇博物館（以下、演劇博物館）の所蔵するノンフィルムの立正活映資料を活用して、同社が製作したフィルムの表層的、環境的な復元を実現させることにある。立正活映は、牧野省三の牧野教育映画と共同で、大正末期から昭和初期にかけて宗教映画を製作したプロダクションであるが、映画史においてその足跡はほとんど知られていない。立正活映は小規模なプロダクションのため、現存資料はきわめて限られており、復元のためには複合的な資料を用いた研究が不可欠である。

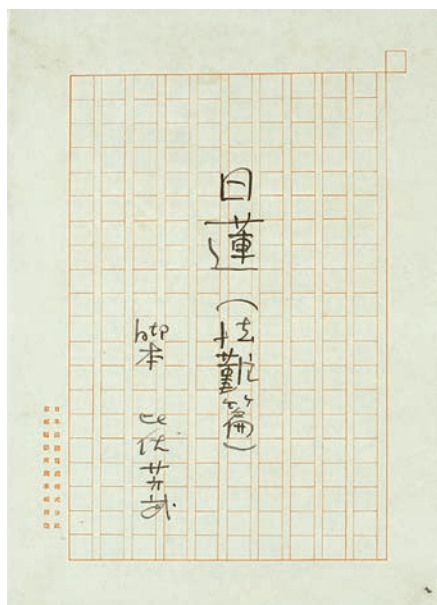
### 【研究成果】

第一に、神戸発掘映画祭2018「発掘と研究 宗教と映画」（2018年10月、神戸映画資料館）において、『鍋かぶり日親』の現存する二巻のうち一巻目のデジタル素材を上映し、上田が牧野教育映画および立正活映について、ユリア・ブレニナ（協力者）が同時代の日蓮主義について解説をおこなった。なお、あわせて『鍋かぶり日親』のシナリオ（妹尾朔著）から、一巻目のインタータイトルをまとめ、来場者に配布した。シナリオからインタータイトルを書き起こす作業は、欠損部分も含めて今年度に継続して実施しており、次年度にスチル写真と

組み合わせた復元映像の作成に活用する。

第二に、立正活映資料の共同調査をおこない、今年度にデジタル化する資料を決定しつつ、具体的な資料の分析をおこなった。共同調査により、立正活映資料の中核を占める映画『日蓮』関連資料29点については、日蓮主義者の大々的な後援にもかかわらず、実際の映画化には至らなかったこと、ただし比佐芳武の不採用シナリオも含め、宗教映画の製作背景・過程が把握できる資料により構成されており、その資料的重要性が明らかになった。

また前年度までの公募研究に関連して、国際シンポジウム「イデオロギーと興行のあいだ 植民地／帝国の映画館、映画文化」（2018年11月、韓国映像資料院）を開催した。共同研究課題の成果発信として、上田が「『満洲国』の映画館と巡回映写」、近藤が「『戦ふ映画館』——戦時下のオフ・スクリーン」、仁井田が「関東大震災後の日本の映画館の近代化」、板倉が「帝国日本における内務省の朝鮮映画検閲」、チョン・ジョンファ（協力者）が「イデオロギーと興行のあいだ——1930年代中盤～1940年代初期の京城の映画館」と題した研究発表をおこない、ドメーニグが戦時下の映画興行・政策に関するディスカッションを務めた。



『日蓮（法難篇）』比佐芳武シナリオ草稿  
A Manuscript of *Nichiren (Honan hen)* by Yoshitake Hisa



『鍋かぶり日親』ポスター  
A Poster of *Nabekaburi Nisshin*

## 描かれた中国演劇と大正期日本—福地信世『支那の芝居スケッチ帖』を中心に

研究代表者：平林宣和（早稲田大学政治経済学術院教授）

研究分担者：袁英明（桜美林大学芸術文化学群教授）、田村容子（金城学院大学文学部教授）、李莉薇（華南師範大学外国語文化学院准教授）、全婉澄（広州大学人文学院専任講師）

### 【研究目的】

本研究課題「描かれた中国演劇と大正期日本—福地信世の『支那の芝居スケッチ帖』を中心に」は、演劇博物館所蔵の福地信世『支那の芝居スケッチ帖』に関する考証を中核としつつ、梅蘭芳の二度の公演（1919年、1924年）およびその他複数の俳優による訪日公演が行われた大正期日本と中国演劇との関わりを、主に視覚資料を軸に考察し、その時代の様相の一端を明らかにすることを目的とする。

### 【研究成果】

2018年度の研究活動については、以下に挙げる三つの区分に関して、それぞれ下記の成果が得られた、あるいは得られる見込みである。

#### （1）福地信世『支那の芝居スケッチ帖』考証作業について

『スケッチ帖』については、研究開始以前の段階で演劇博物館によりすでに全資料のデータベース化、および各スケッチに書き込まれていた文字の翻刻が一通り行われていた。今年度の研究活動では、翻刻された記述内容について、当時の『順天時報』、『晨报』、『申報』などに掲載された上演広告等と照らし合わせ、それらがどの程度正確なものか、考証作業を行った。これら同時代の資料により、福地信世が当時目にした芝居の詳細を裏付けることができた。

#### （2）福地信世研究

福地信世は、中国で『スケッチ帖』を描いたほか、1919年の梅蘭芳初訪日公演を積極的に支援、その時代に梅蘭芳がたびたび演じていた崑曲の演目『思凡』を翻案し、新舞踊の象徴的作品として舞台化している。この新舞踊『思凡』について、研究分担者の李莉薇が、『『思凡』在日本的伝播と接受——兼談梅蘭芳訪日公演的影響』というタイトルの研究報告を行った。『スケッチ帖』以外の演劇博物館所蔵資料を活用した研究により、新舞踊『思凡』の創作に関する詳細が初めて明らかにされた。

また10月に来日した上海崑劇団とともに講座と上演『崑劇と日本の百年』を主催、1919年の公演時に上演された崑曲の演目『琴挑』を崑劇団に特別に上演してもらい、当時福地信世が観劇した中国の芝居を理解するための参考とした。

#### （3）大正期の中国演劇に関する視覚資料研究

福地信世が『スケッチ帖』を描いた時代には、同様な中国の演劇のスケッチや絵画、写真、彫刻などの視覚資料が大量に流通していた。これら福地信世の『スケッチ帖』を取り囲む当時の文化的環境については、研究チームメンバーである袁英明、佐々木幹、李莉薇、および平林宣和が、2019年1月26日に北京で開催される「梅蘭芳初訪日公演100周年記念学術シンポジウム」にてそれぞれ成果報告を行う予定である。



福地信世「梅蘭芳の貴妃醉酒」、『支那の芝居スケッチ帖』  
Fukuchi, Nobuyo, "Mei Lanfang's 'Guifei zui jiu,'" *Shina no shibai sukeecchi-cho*



# Mission and Vision

Director of the Collaborative Research Center for Theatre and Film Arts

Minako Okamuro

Managed by the Tsubouchi Memorial Theatre Museum, the Collaborative Research Center for Theatre and Film Arts at Waseda University was established in 2009 after being accredited as a joint usage/research center by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT). Since becoming re-accredited in 2014, five research teams have pursued a joint research program based on an investigation of unreleased materials owned by the museum, and in 2018 four new teams went to work on research. Also, in 2016 a MEXT grant for *Tokushoku aru kyodo kenkyu kyoten no seibi no suishin jigyo: kino kyoka shien* (“a Scheme to ‘Promote the Maintenance of Distinguished Joint Research Centers’: Support for Enhancing Function”) was obtained, and this year the program reached its culmination, producing noteworthy results.

This year, under the joint research program, one principal research project based on materials held by the museum and four publicly selected research projects were undertaken, resulting in the accumulation and publication of diverse research results. The principal research project investigated and examined an large quantity of materials and was called “Basic Research Survey of Materials relating to Shoyo Tsubouchi and Shiko Tsubouchi.” The four newly selected research teams also energetically researched their respective materials, publishing exciting researches on projects titled “Research on Musicians and Musical Bands regarding Kurihara Musical Score Collection,” “Understanding the Studio System in Postwar Japanese Cinema: Empirical Research on Nikkatsu Roman Porno,” “The Restoration of the Rissho Katsuei Films based on the Multiple Material,” and “Visual Depictions of Chinese Theater and Taisho Period Japan: Focusing on Nobuyo Fukuchi’s *Shina no Shibai Sukecchi-cho*.” These researchers examined materials from diverse perspectives, collaborated with other parties including actors and musicians, and presented novel achievements of theater and film research

to the world.

Under the Support for Enhancing Function Program, whose final year was 2018, the following four projects were undertaken: (1) Collaboration with Overseas Universities and Cultivation of Human Resources, (2) Development of a Comprehensive Database of Pre-modern Materials Using *Kuzushiji* OCR Technology, (3) Building a Digital Archive of *Kabuki* and *Ningyo Joruri* Magazines, and (4) Digitization and Sharing of Theater and Film Materials. Throughout 2018, unprecedented achievements were made in collaborating with overseas research institutions and cultivating human resources; in addition, digitization of materials led to numerous breakthroughs. First, a number of international symposiums on theater and film were held in collaboration with well-known overseas research institutions such as the University of Birmingham’s Shakespeare Institute in the United Kingdom, the University of California at Los Angeles in the United States, and the Korean Film Archive in South Korea, building a foundation for continued joint studies. Also, as digitization of new materials proceeded, multifaceted projects were undertaken to expand the possibilities of employing these materials as cultural resources. The project that applied *kuzushiji* (characters in cursive style) OCR technology to pre-modern materials related to classical theater accumulated information in a multilayered fashion to make the database more comprehensive. With regard to the silent films digitized previous years, we obtained the cooperations of performers including actress Shigeru Muroi to add new voices to them. These accomplishments were screened in public events and applauded by the audience.

The center will continue to put to use the Theatre Museum’s rich research resources, undertaking international joint research activities with overseas research institutions, and remaining active as a joint research center. We sincerely thank all of you for your continued support and cooperation.

# Scheme to Promote the Maintenance of Distinguished Joint Research Center — Support for Enhancing Function

This program, which began in 2016 with a Support for Enhancing Function grant from MEXT, aims to contribute to the development of theater and film studies both in Japan and abroad through preparing a research environment focused on collaboration with overseas universities, cultivating human resources, and digitizing materials. To this end, we are pursuing the following four projects.

## Collaboration with Overseas Universities and Cultivation of Human Resources

This project facilitates interaction among personnel and cultivation of the next generation of researchers in collaboration with overseas research institutions. In 2018, in partnership with research institutions in an unprecedented number of countries (the United States, Europe, and East Asia), we carried out joint projects and publicized the results in several events noted below.

### International symposium: “Modern Adaptation and Performance of Shakespeare”

As part of a collaborative program that has been ongoing since 2016 with the University of Birmingham’s Shakespeare Institute, a global hub for Shakespeare research, the Theatre Museum held an international symposium titled “Modern Adaptation and Performance of Shakespeare” (Nov. 26, 2018, Ono Auditorium).

In the first portion of the symposium, four speakers from the United Kingdom and Japan discussed modern adaptations of Shakespeare. First, well-known Japanese *kyogen* actor Mansai Nomura explained how various elements of *noh* and *kyogen*, such as usage of masks, were put to use in three adaptations of Shakespeare in which he was involved. Next, Tiffany Stern (professor at the University of Birmingham’s Shakespeare Institute) discussed actual performances in Shakespeare-era England in which different plays were performed on consecutive days as well as the unique characteristics of Shakespeare’s texts. Actor/performer Angus Jackson (Royal Shakespeare Company) discussed his experiences directing a series of Shakespeare’s works set in ancient Rome as an example of modern performance in the United Kingdom, and explained how changes in governance, the state, and society across disparate time settings were expressed. Finally, actress/performer Kelly Hunter (artistic director of the Flute Theatre) discussed contemporary performance practice, including performance practice in social education, and explained how Shakespeare’s texts were used recently in a workshop for children with disabilities, and how this experience served as a gateway to a new kind of performance.

In the second portion, Nomura and Hunter read Act 1, Scene 7 of *Macbeth* in Japanese (Nomura) and English (Hunter), drawing applause from attendees. Finally, a discussion was held, with Michael Dobson (director of the University of Birmingham’s Shakespeare Institute) serving as moderator, to discuss similarities between English and Japanese performances of Shakespeare’s works and theater cultures of both countries, demonstrating again a renewed significance of pursuing international joint research.

### International symposium: “Between Ideology and Show Business: Colonial/Imperial Movie Theaters and Film Culture”

As part of our efforts to internationally publicize the results of research on the prior year’s joint research themes, we held an international symposium titled “Between Ideology and Show Business: Colonial/Imperial Movie Theaters and Film Culture” (Nov. 3, 2018) in South Korea. It was hosted by (and at) the Korean Film Archive with the joint sponsorship of the Kobe Gakuin University Faculty of Humanities and Sciences Research Promotion Grant. This groundbreaking event took a historical perspective on investigating the international development of the film industry in East Asia, a theme that has become increasingly popular in research. To publicize results on joint research themes, Manabu Ueda (associate professor at Kobe Gakuin University) gave a lecture on Manchurian movie theaters and screening tours, and researcher Kazuto Kondo (postdoc special researcher at the Japan Society for the Promotion of Science) examined film industry practices surrounding wartime Japanese movie theaters. Chie Niita (part-time instructor at Waseda University) discussed the various practices undertaken to modernize Japanese movie theaters after the Great Kanto Earthquake without limiting the discussion to wartime policies, and Fumiaki Itakura (professor at Kobe University) examined the censorship of Korean films by the Japanese Ministry of Home Affairs. Collaborative researcher Jeong Jong-hwa (Korean Film Archive) gave a research presentation focused on movie theaters in Seoul from the mid-1930s to the early-1940s,

and researcher Roland Domenig (associate professor at Meiji Gakuin University) served as a moderator for a discussion concerning wartime film industry policies. In addition to the above, three presenters and five panelists took part in a lively discussion and exchange of views among Japanese and Korean researchers. The forms taken by Japanese and Korean film industries amid the trend toward Japanese imperialism were considered from a wide variety of angles.

### The “90<sup>th</sup> Anniversary of Kabuki in Vladivostok” event to commemorate the first kabuki performance in Russia

At the end of July 2018, a collaborative event entitled “90<sup>th</sup> Anniversary of Kabuki in Vladivostok” was held to commemorate the anniversary of the first kabuki performance in Russia. There was a demonstration/workshop by Sadanji Ichikawa and Tsutanosuke Ichikawa, a performance of Oganomachi children’s kabuki, and a speech by Takayuki Hioki (associate professor at Shirayuri University), who discussed a document held by the Theatre Museum (*Kabuki Sovieto koen harikomicho*) that put the museum’s important materials on the Russo-Japanese cultural exchange to use in further cultural collaborations. In this respect, the center serves as a hub for broad overseas dissemination of Japanese theater culture, including kabuki.

### International symposium “Talking Silents New Approaches to Early Japanese Cinema and the Art of the Benshi” Film screening and Film Screening “The Art of the Benshi” at the University of California at Los Angeles

As a collaborative project between this center and the University of California at Los Angeles (UCLA), a

symposium titled “Talking Silents: New Approaches to Early Japanese Cinema and the Art of the Benshi” and screening focusing on *benshi* (live narrators for silent films) titled “The Art of the Benshi” will be held from March 1–3, 2019, on the UCLA campus. Being based on the UCLA’s proposal, the event is to be realized by the great effort of the joint research team at this center who has accumulated the knowledge and experiences. At the symposium, David Desser (professor emeritus at the University of Illinois), the museum’s vice-director Ryuichi Kodama, Keiko Sasagawa (professor at Kansai University), Kotaro Shibata (research associate at this center), Fumito Shirai of the joint research team (postdoc special researcher at the Japan Society for the Promotion of Science), Kazuto Kondo, and others will speak. At this gathering of front-line researchers from Japan and the United States, we expect that *benshi* and other aspects of Japanese film culture will provide a jumping-off point for wide-ranging discussions.

### Young researcher overseas dispatch project

As in past years, we have encouraged young researchers throughout Japan to participate in overseas research presentations. This year, we assisted Mariko Kasahara (University of Tokyo Graduate School of Humanities and Sociology) with a portion of her travel expenses[Report: Mariko Kasahara] The presenter took part in the international research conference “Evil Women: Women and Evil” held in Vienna on Dec. 1 and 2, 2018. She delivered the research presentation “Character Analysis of Manon Lescaut in 20<sup>th</sup> Century Film: From the Viewpoint of Manon Lescaut’s Lover, Des Grieux.” Around 40 participants were required to attend all tables, at which vigorous discussions took place. The presenter also collected and investigated materials concerning opera performances and representations of Manon Lescaut at the Vienna State Opera.

## Development of a Comprehensive Database of Pre-modern Materials Using *Kuzushiji* OCR Technology

This project uses *kuzushiji* OCR technology to construct a new environment for researching pre-modern materials related to the theater (in particular, *yoruri maruhon* and kabuki *banzuke*). Our main achievement in 2018 was to build a multi-function database for both *yoruri maruhon*

(reciter’s book) and kabuki *banzuke* (program) materials by adding further data to the research results accumulated in prior years, thereby presenting one model for a comprehensive database of pre-modern materials.

With regard to *yoruri maruhon* (*Kanadehon chushingura*

and *Yoshitsune senbon zakura*), in addition to previously created transcription data, we updated the viewer to also display information on ruby characters, *suteji*, and *mojifu* that indicate the melodies of *yoruri*. *Mojifu* have proved consistently problematic when reissuing *yoruri maruhon*, but this project allows them to be displayed within a web browser for the first time. With assistance from Mizuki Takusagawa (Chiba University), we investigated methods for storing *mojifu* data and displaying *mojifu* within a web browser-based viewer. In an attempt to achieve a model that will allow for searches benefitting future research on *maruhon*, we created a *mojifu*-specific database on Waseda University's Cultural Resource Databases and linked it with the viewer on the center's website.

With regard to kabuki *banzuke*, we created new data for two *kaomise banzuke* and two *yakuwari banzuke*, as well as data for family crests and other aspects that had not previously been part of the database. In this sense, building an image database such as this is a truly modern way to make use of *banzuke*.

With help from an updated viewer that displays research

results from prior years in a multilayered fashion, these data have been published online on the center's website, taking advantage of the strengths of digital publication in a way that expands the possibilities of comprehensive databases. In addition, *kuzushiji* character data stored previously has been published on Waseda University's Cultural Resource Databases, allowing them to be accessed in multiple ways.

In March 2019, as part of a panel discussion at the Gakugeki Gakkai society, "*Kuzushiji* and Digitization: The Theatre Museum's *Kuzushiji Decipherment Support Study*," Takusagawa and Tomejiro Osawa (Toppan Printing Co., Ltd.) and research associate Shibata will report on the results of the research accomplished by this project. These talks are expected to draw great interest from expert researchers. Also, we are planning to create "Guidelines on Digitization of *Kuzushiji*" to summarize the three-year project, and also in March, we will release a basic guide for similar undertakings by foreign and domestic research facilities.

## Building a Digital Archive of *Kabuki* and *Ningyo Joruri* Magazines

This project will create a digital reading environment for the rich array of theater magazines held by the Theatre Museum, and to improve preservation of these materials for ease of reading.

In 2018, for example, we digitized 35 issues of *Opera*, a magazine on Asakusa opera held by the Theatre Museum. This magazine provides valuable discourse on the Asakusa opera of the time, including reviews of plays, suggestions for producers and play actors, as well as other articles and

reader submissions. There are very few extant copies of the magazine and the museum holds only a small number of them. The paper quality is poor and it has been difficult in the past to view the actual magazines at the Theatre Museum. As part of this project, by taking high-quality digital photographs, we were able to make the magazines available for wide viewing within the Theatre Museum's Japanese book reading room. This availability should help to invigorate prewar theater and music research.

## Digitization and Public Offering of Theater and Film Materials

As part of this project, we are newly digitizing theater and film materials held by the Theatre Museum, and are carrying out a number of projects that expand the usage and application of materials digitized in prior years.

### Digitization of early television scripts

As part of the Early Television Script Digitization Project, ongoing since 2016, we have digitized scripts related to adjacent fields (literature, film) that played important roles in the early days of television. These materials demonstrate that television was an important field for a wide range of

artists, including Kobo Abe, Shuji Terayama, Yasujiro Ozu, Nagisa Oshima, and Susumu Hani. The digitized scripts have been provided for viewing on special terminals in the library at the Theatre Museum and as part of the permanent exhibitions of the Museum, to communicate the significance of these script materials to a wide range of museum visitors.

## Digitization of film materials

We have worked to expand the usage and application of two types of film materials digitized in prior years. First, we worked on *Chie no Wa Kurabu* (TBS, 1966), a television program that featured the Theatre Museum. Because the film copy held by the museum contains no sound other than the opening music, we commissioned actress Shigeru Muroi to voice five characters based on the broadcast script, and had the program edited by film and television director Takashi Nishihara. The footage with the new audio was unveiled at the museum's 90<sup>th</sup> anniversary ceremony, to the great fascination of attendees.

To celebrate the digitization of the film *Nogi Shogun* (directed by Tomiyasu Ikeda, 1935), found in the collection of the late Shoichi Ozawa, we held a symposium and film screening entitled "Japanese Film and the Culture of *Katarimono*" (Dec. 15, 2018, Ono Auditorium). Because the film was a silent edited version of a "rokyoku talkie," two screenings were held, one with *benshi* Ichiro Kataoka and pianist Eri Kanzaki, and one with *rokyoku* performer Ichitaro Azumaya and shamisen accompanist Mitsu Azumaya. In a related program, *Satsuma biwa* player Nobuko Kawashima played one of the *biwa* scripts held by the National Film Archive of Japan, which is for a film of the same name, *Nogi Shogun*. At the symposium, research associate Shibata, Masayoshi Manabe (professor at the University of

Kitakyushu), and Hiroshi Komatsu (professor at Waseda University) held discussions from multiple perspectives including the history of film, the history of *rokyoku*, and the history of the film's musical style. Also, theater and entertainment critic Seiichi Yano discussed the involvement of the film's one-time owner Ozawa in *rokyoku*, *nogimono*, and theater with the museum's vice-director Kodama serving as interviewer. This film, held by the museum, provided an opportunity to shed light on multiple facets of the diverse culture of story within Japanese film.

## Digitization of the Tsuruta Collection

We proceeded with the digital release of the Tsuruta Collection, consisting of 893 materials related to prewar film in Kumamoto, owned by the late Kashichiro Tsuruta. With the joint sponsorship of the Kumamoto University Faculty of Education and the Yamaga City Regional Development Corporation (a general incorporated foundation), we held a film screening and symposium titled "Resurrecting Silent Films at Yachiyoza" (Sept. 1, 2018) at Yachiyoza theater in Kumamoto. Manabu Ueda, Yutsuki Kanda (professor at Ochimizu University), the museum's vice-director Kodama, and research associate Shibata provided multifaceted discussions on Edo period theater culture, the *shinkokugeki* theater of the Taisho and Showa periods, and Kumamoto's film industry.

We are also preparing to publicize many digital images accumulated through the joint research projects, and to complete the work of exhibiting film score materials, prewar Japanese film industry materials, and Chinese theater materials in the museum. We hope that digitally publicizing the museum's valued theater and film materials will further invigorate theater and film research.

In 2018, the joint research teams compiled their findings and made their presentations. The following section introduces some of their activities.

### Principal Research 1 Basic research survey of materials relating to Shoyo Tsubouchi and Shiko Tsubouchi

A conference was held on November 12, 2018, to report the results of this research team's investigation and study of unsorted materials related to Shoyo Tsubouchi (Shoyo) and Shiko Tsubouchi (Shiko). Five members of the research team conducted presentations.

Kaho Mizuta reported on a lecture plan from the late-Taisho period owned by the late Shiko, showing stage photographs of the Gikyoku Kenkyukai society and discussing the new form of Japanese theater for which Shiko advocated. Kaoru Matsuyama analyzed the content of seven letters from Daigo Ikeda to Shoyo, referencing them against Shoyo's diary and conducting a concrete investigation of Daigo's Mumeikai-era activities, the Gekidan-kai, the process of creating *Meigetsu hachiman matsuri*, and his relationship with Shoyo. Kazuko Yanagisawa used letters to trace the relationship between Shoyo and *Sekkyo-bushi* performer Wakatayu Wakamatsu which began with a Tokyo *Kuruma-ningyo* performance. Yanagisawa also

investigated materials such as the two men's diaries. Kuniko Hamaguchi discussed the relationship between Shoyo and Nagoya-based Nishikawa-style dancer Kagi Nishikawa (Kagi Oda), a distant relative of Shoyo's, as well as Kagi's death, the dance performance at her memorial, and letters to Shoyo from Shiko's younger sister, Shizu Oda. Finally, Tomoaki Kojima discussed in detail the interaction between Matsutaro Ishiwari, Shoyo, and persons at Waseda University based on letters, Shoyo's diary, and memoirs. Kojima considered the time and motive of when a research study on *Ningyo joruri* (puppet theater) was started.

This research team has sorted and photographed materials related to both Shoyo Tsubouchi and Shiko Tsubouchi, and is proceeding with research on this basis. We have been able to publicize various facets of our research and to hold what proved to be a meaningful conference.

### Selected Research 1 Research on musicians and musical bands regarding Kurihara's musical score collection: music for stage and cinema during the early-Showa era

On January 30, 2019, this research team held a public conference based on an investigation of materials owned by Shigekazu Kurihara, who played in Ken'ichi Enomoto's band. During the first half of the conference, Fumito Shirai and Yohei Yamakami reported the results of their investigation of score materials, and a research associate at the center, Kotaro Shibata, conducted a presentation on Kurihara and his musical activities at the Asakusa Nihon-kan movie theater. Masaaki Nakano made a research presentation on the adaptations of Ken'ichi Enomoto's comedy shows, and Makiko Kamiya gave a research presentation examining the significance of Enomoto's films in the history of Japanese cinema. Comments by Midori Takeishi and a panel discussion by the speakers also shed light on specific subjects such as musical performance and song selection, as well as

their involvement in the diverse activities of Enomoto, including plays, revues, and films. During the second half of the conference, in addition to an introduction and analysis of SP recordings by Masato Mori, specialist of the SP records of the time, a seven-person band led by saxophonist and clarinetist Kyoichi Watanabe performed compositions selected from Kurihara's materials. Music of Kurihara, who was an early adopter of the new repertory of the time, was vividly resurrected thanks to the band's reproduction of characteristics such as the rich, harmonious saxophone tone that accompanied Enomoto's original performances. This proved to be a meaningful conference that has spurred development of future research, such as further study of score materials and investigation of contemporary documents.

### Selected Research 2 Understanding the Studio System in Postwar Japanese Cinema: Empirical Research on *Nikkatsu Roman Porno*

On December 22, 2018, a conference titled "*Nikkatsu Roman Porno* Interpreted Through Press Sheets" was held at Waseda University's Toyama campus. First, Michiko Usui explained the general outline of the team's project and the purpose of the conference, touching on topics such as the definition of "press sheets" and the idea of the "studio system" within the context of Japanese cinema, a topic that is also a research project theme. Also in the first part of the conference, Keisho

Kihara gave a general outline of the press sheets held by the Theatre Museum, including graphs showing the total number of sheets, their distribution by year, and other details. Next, Mio Hatokai presented a case study of the use of promotional materials such as press sheets, posters, and newspaper advertisements using *Sukeban keiji Dirty Mary* (1974) as an example.

In the second part of the conference, Naoya Narita and Tomoko Saotome, who were responsible for the

production and promotion of *Nikkatsu Roman Porno*, took part in a roundtable discussion with Jinshi Fujii and Hatokai serving as interviewers. Narita, who had worked as a producer at Nikkatsu Corporation during the *Roman Porno* period, discussed the background of films for which he was responsible, such as the *Tenshi no harawata* series and *Love Hotel* (1985); similarly, Saotome explained how taglines and summaries on press sheets were written/created, as well as how they were used in advertising, with reference to specific

episodes.

There has been little testimony concerning the distribution and exhibition of *Roman Porno*, and such information is not well-known even among film researchers. Although press sheets are available, almost no prior film studies research have used these materials. This event, which intended to approach press sheets from a variety of angles, should provide a fresh point of departure for future studies.

### **Selected Research 3 Restoration of the works of Rissho Katsuei Film Company based on multi-materials**

"Discovery and Research: Religion and Film" at the Kobe Discovery Film Festival 2018 was held with the joint sponsorship of the Kobe Planet Film Archive Executive Committee. At the event, representative Manabu Ueda presented the results of a joint research project that examined the history behind the production of *Nabekaburi Nisshin* (1922) and *Shaka no shogai*

(1961), as well as the surviving film; in addition, his collaborator, Yulia Burenina, gave a research presentation on 1920s Nichiren Buddhism and Nisshin. This event also included a screening of digital materials of these films; in particular, the screening of *Nabekaburi Nisshin* garnered the attention of many audience members because this film was thought to be lost.

### **Selected Research 4 Visual depictions of Chinese theater and Taisho period Japan: focusing on Nobuyo Fukuchi's *Shina no Shibai Sukecchi-cho***

On October 23, 2018, a speech and performance sponsored by the Waseda University Theatre Museum's Collaborative Research Center for Theatre and Film Arts, titled "100 Years of Kun Opera and Japan," was held at the Okuma Auditorium.

This event was held in response to a request from the Shanghai Kun Opera Troupe on a visit to Japan, who desired to hold a promotional event at Waseda University for their performances of "*Kunju zoujin xiaoyuan*" all around the country. This request was accepted and fulfilled by the Waseda University Theatre Museum's Collaborative Research Center for Theatre and Film Arts and its joint research team.

This year, in 2019, will be the 100<sup>th</sup> anniversary of the first Japanese performance by Chinese actor Mei Lanfang, world-renowned for playing female lead roles. Mei, who has deep ties to Waseda University, held several Chinese *Kun* opera performances in Japan, which were the first times people had ever seen such opera performed on a Japanese stage. This event provided an opportunity to look back on Japan's relationship with *Kun* opera initiated by these performances, featuring the Shanghai Kun Opera Troupe's performance of "*Yuzanji: qintiao*," which Mei performed on his visit to Japan.

On the day of the event, a long line of attendees formed outside Okuma Auditorium, and ultimately more than 600 people attended the event. Professor Norikazu Hirabayashi of Waseda University explained the meaning of the title "100 Years of *Kun* Opera and

Japan," after which Gu Haohao, leader of the Shanghai Kun Opera Troupe and director of the Shanghai Chinese Opera Arts Center (which plays a leading role in the Shanghai traditional performing arts world) gave a talk on *Kun* opera and the Shanghai Kun Opera Troupe.

In the second part of the conference, coordinator Lu Hairong commented on the program and *guqin* player Yang Zhijian, who had accompanied the troupe to Japan, discussed the history of Sino-Japanese exchange through the *guqin* (*koto* in Japanese), then performed the famed piece "*Gaoshan liushui*."

Next, three *Kun* opera plays were performed, including the tempestuous swirling movements of Qian Yuting's Hu Sanniang in *Hujiazhuang* and Wu Shuang's humorous performance as Lu Zhishen and the liquor merchant in *Hunangdan: shanting*. In the third play, "*Yuzanji: qintiao*," the audience breathlessly observed the longing of the student and the nun for one another, played by Li An and Chen Li, respectively, as expressed through the playing of a lute.

Finally, Gu Haohao and Theatre Museum director Minako Okamuro exchanged thank yous and mementos, and befitting an event commemorating the 40<sup>th</sup> anniversary of the conclusion of the Treaty of Peace and Friendship between Japan and China, the 90<sup>th</sup> anniversary of the founding of the Theatre Museum, and the 40<sup>th</sup> anniversary of the founding of the Shanghai Kun Opera Troupe, the curtain closed amid an atmosphere of harmony.

○ Principal research

The principal research involves a joint research project on the theme proposed by the Institute, which researchers were encouraged to participate in. The titles and affiliations of the project members listed below were accurate at the time this newsletter was edited, but may have changed subsequently.

Principal research

1

## Basic Research Survey of Materials Relating to Shoyo Tsubouchi and Shiko Tsubouchi

Principal Researcher: Kuniko Hamaguchi (Affiliated Lecturer, The College of Intercultural Communication, Rikkyo University)

Collaborative Researchers: Akira Kikuchi (Adjunct Researcher, Waseda University Theatre Museum), Tomoaki Kojima (Part-time Lecturer, Musashino Art University), Kaoru Matsuyama (Part-time Lecturer, Faculty of Education and Integrated Arts and Sciences, Waseda University), Kaho Mizuta (Adjunct Researcher, Waseda University Theatre Museum), Kazuko Yanagisawa (Part-time Lecturer, Faculty of Education and Integrated Arts and Sciences, Waseda University)

### Purpose of research

This research project will culminate in the complete inventory of all letters addressed to Shoyo Tsubouchi that have yet to be sorted, as well as putting them into order, developing a plan for reprints, and making public a number of letters, primarily those related to the *Collected Letters of Shoyo Tsubouchi*. The sorting, reprinting, and study of letters addressed to Shoyo will enable the rough dating of any undated letters in the *Collected Letters of Shoyo Tsubouchi* and allow their content to be studied within the context of an exchange of letters, shedding light on new facets of Shoyo's activities, contemporary historical background and his interactions, as well as contributing to the further revision of Shoyo's diary, which is currently in progress.

Materials related to Shiko Tsubouchi that we began to investigate, incidental to this research project, depict a figure whose diverse theatre-related activities have drawn increasing praise in recent years, and the publication of these materials is eagerly awaited. We hope that the drafts, scripts, flyers, letters, and photographs will illuminate aspects of Shiko's contributions to modern Japanese theatre and dance such as prewar Shinbungei Kyokai and Takarazuka Shingekidan plans, his activity in forms of new theatre such as Takarazuka and Toho, and his criticism of postwar Japanese dance.

### Research results

○ Shoyo Tsubouchi materials

We sorted and cataloged the previously unsorted letters of Shoyo Tsubouchi and associated documents, digitally photographing a total of 278 items, including documents related to the founding of the Theatre Museum and photographs owned by the late Shoyo, and five volumes (306 pages) of a scrapbook of letters addressed to Shoyo, which contained 263 letters, including the *Rokuro Yashiro Letter Collection*. In addition, the reprinting of 50 pieces of correspondence, including letters from Hogetsu Shimamura and Mimei Ogawa, was completed. Following, a conference was held

to report the results of research based on the reprinted letters (Nov. 12, 2018, Building 6, Room 318). Topics discussed in detail included Daigo Ikeda's activities during the Mumeikai era, his process of writing *Imayo torimushiuta* and *Meigetsu hachiman matsuri*, and his close interactions with Shoyo (Matsuyama's "Shoyo and Daigo Ikeda: Daigo Ikeda's Letters to Shoyo in the mid-Taisho period"), the life of Kagi Nishikawa and her relationship to Shoyo (who was a relative) (Hamaguchi's "Kagi Nishikawa: Dance Activities and Tendencies in Later Years"), Wakatayu Wakamatsu's interactions with Shoyo in 1924 on the subject of *Fukusa ningyo* (Yanagisawa's "Wakatayu Wakamatsu's 1924 Letters to Shoyo"), and the relationship between Shoyo and Matsutaro Ishiwari as well as Ishiwari's research on *Ningyo joruri* (Kojima's "Matsutaro Ishiwari and Shoyo"). Detailed notes were added to 35 of the letters, which were published in *Engeki kenkyu* Vol. 42 (Matsuyama, Hamaguchi, and Yanagisawa's "Letters to Shoyo Tsubouchi from Daigo Ikeda, Kagi Nishikawa, Shizu Oda, and Wakatayu Wakamatsu in *Collection of Letters from Various People to Shoyo Tsubouchi 4*").

○ Shiko Tsubouchi materials

We created an inventory of 439 unsorted manuscripts in Shiko's own hand, which only covers the contents of one box out of twenty. Thirty-nine of these manuscripts were lecture plans from the late-Taisho period and shed further light on Shiko's new theatre activities in the Taisho period and early-Showa period such as his involvement in the Gikyoku Kenkyukai and Geijutsu Kyokai societies from 1921 to 1924 and in the Takarazuka Kokuminza theatre from 1926 to 1930. Until recently, this had rarely been examined due to limited documentation. In lectures, Shiko discussed new forms of Japanese theatre in pursuit of a form of national theatre that would please the masses. In this regard, we issued a report (Mizuta's "Records of Shiko Tsubouchi's Lectures: Focusing on New Theatre Activities of the Late Taisho Period") at a conference by the team (Nov. 12, 2018, Building 6, Room 318).

○ Selected research

The selected research consists of joint research projects derived from the reviewed proposals, which aim to promote the effective use of the Theatre Museum's collections. The Institute provides a venue and materials for these joint research projects. The titles and affiliations of the project members listed below were accurate at the time this newsletter was edited, but may have changed subsequently.

Selected research

1

## Research on musicians and musical bands regarding Kurihara's musical score collection: music for stage and cinema during the early-Showa era

Principal Researcher: Masaaki Nakano (Affiliated Lecturer, School of Arts and Letters, Meiji University)

Collaborative Researchers: Midori Takeishi (Professor, Faculty of Music, Tokyo College of Music),

Makiko Kamiya (Visiting Researcher, National Film Center, The National Museum of Modern Art, Tokyo),

Fumito Shirai (JSPS Research Fellow PD), Yohei Yamakami (Part-time Lecturer, Faculty of Music, Tokyo University of the Arts), Masato Mori (Independent Researcher)

### Purpose of research

Shigekazu Kurihara (1897-1983) was a musician active in the early-Showa period as a conductor and an arranger in Ken'ichi Enomoto's band, Shochiku Kinema's performance department, and also the PCL (Photo Chemical Laboratory) film studio in the early days of talkies. This research project investigates and analyzes the *Sheet Music Collection of Ken'ichi Enomoto's Band/Shigekazu Kurihara* (approximately 500 pieces), which is supposed to be a part of the entire original collection. Starting from a basic investigation of the sheet music materials available, this research project investigates and compares contemporary documents, related materials, and other sheet music collections in order to examine the creation and performances of contemporary theater troupes and movie theaters based on the activities of musicians and bands from the early-Showa period across a wide range of genres.

### Research results

We have completed a general investigation of approximately 500 materials from the sheet music collection noted above, discovering that these materials comprise a detailed record of the collection and usage of imported musical pieces by Kurihara, who was active in Ken'ichi Enomoto's band from the early-Showa period until after the war.

- Cataloguing and investigation/analysis of an inventory of sheet music materials

Ultimately, we created an inventory of 494 pieces of sheet music from the collection, which is mostly comprised of imported musical pieces with a focus on jazz and includes a mixture of printed music and handwritten scores. The printed music is divided between published music that lists publication information and whose sellers are known (220 pieces), and printed music whose sales and distribution channels are unclear (approximately 150 pieces). We reviewed information such as the piece titles, composers' names, lyricists' names, arrangers' names, and publishers of the music, as well as the names of the theater troupe and the names of bands when available (e.g., Pierre Brillant/

Ken'ichi Enomoto Ichiza and Toho Orchestra) as well as information such as shop names (e.g., Ogura Instrument Shop) and seals indicating ownership by Kurihara himself or the Asakusa Shochikuza Theater, in the case of hand-written scores on staff paper (approximately 80 pieces). As a result of transcribing this information into an inventory list and investigating it, we determined that it is highly likely that these materials are part of a systematically organized collection of sheet music that Kurihara collected and used from the 1930s until after the war.

- On the provenance of the sheet music materials

In combination with our investigation of materials, such as the NHK (Japan's national public broadcasting organization) television program "*Nihon kigekijinden (1) - gendai seminar - Enoken to sono nakamatachi*" (July 16, 1990), it became clear that this sheet music collection was only a portion of 25 cardboard boxes of sheet music from the total collection given by Kurihara to jazz critic Masahisa Segawa. Among the materials are pieces of sheet music ordered alphabetically with four-digit handwritten numbers. Many numbers in the four-digit sequence are missing, and it will be necessary to collect and investigate further materials from the collection in order to obtain a more robust picture of what the entire collection contains.

- An attempt to compare and apply image and sound sources

On August 20, 2018 we held a seminar at which Kurihara- and Enomoto-related SP recordings from the collection of research team member Masato Mori were analyzed. Then, at a public conference on January 30, 2019, we held a symposium to discuss outlines of the investigation by the joint researchers and a research presentation on the activities of Enomoto, in which Shigekazu Kurihara was involved, such as plays, films, and revues. Jazz performer Kyoichi Watanabe and others held a reference performance based on Mori's analysis of the recordings, providing an opportunity to consider the concrete characteristics of the songs on the sheet music owned by Kurihara.

## Understanding the Studio System in Postwar Japanese Cinema: Empirical Research on *Nikkatsu Roman Porno*

Principal Researcher: Michiko Usui (Associate Professor, Kanto Gakuin University)

Collaborative Researchers: Keisho Kihara (Graduate School of Interdisciplinary Information Studies, The University of Tokyo), Marie Kono (Part-time Lecturer, Rikkyo University and Aoyama University), Mio Hatokai (Doctoral Program, Waseda University, JSPS Research Fellow DC2), Fujii (Professor, Faculty of Letters, Arts and Sciences)

### Purpose of research

The adult “program picture” films labelled “*Nikkatsu Roman Porno*” were the last stand of the studio system; as such, they played an important role in the history of postwar Japanese cinema. By sorting *Roman Porno* press sheets held by the Theatre Museum and investigating their content, this joint research project examines from multiple angles the history of Nikkatsu, a film studio that did everything from production to exhibition of its films, with a focus on the *Roman Porno* period. Also, by focusing our research on press sheets, which have not been employed in previous academic studies even though they can help to clarify such aspects as distribution and exhibition, we aim to suggest new directions for film studies.

### Research results

The existence of press sheets as materials related to advertising of film products is widely known, and in recent years there have been cases of press sheets assisting with the analysis of individual films. Conversely, many facets of the press sheets themselves remain unknown, such as the categories and details of the information they display and the methods by which they were employed in actual advertising; similarly, they have not been sufficiently investigated as a research theme. In this sense, the present investigation has a high degree of significance in terms of illustrating the role of press sheets in the process of production, distribution, and exhibition of films, and in building a foundation for their application in film studies research. The two main

achievements of the research project are described below.

- Discovery of general information concerning the *Nikkatsu Roman Porno* press sheets held by the Theatre Museum

We sorted the *Roman Porno* press sheets held by the Theatre Museum which had previously remained unsorted, clarifying general information such as the actual number of sheets (955), their differences in size, changes in the number of sheets by year, and other criteria. We also digitized all the large-size sheets, which have high value as research materials; as such, we expect that these materials will be digitally displayed on museum terminals in the future.

- Held a public conference entitled “*Nikkatsu Roman Porno* Interpreted Through Press Sheets”

Along with the research team’s report on sorting of materials and case studies using the press sheets (Part One), two former Nikkatsu employees involved in production and advertisement of *Roman Porno* (Naoya Narita and Tomoko Saotome) were invited to give talks on the subject (Part Two). In the past, *Roman Porno* films were largely ignored, except when directed by a critically acclaimed “auteur.” On this occasion, however, by placing the focus on press sheet materials, we reconfirmed the important role played by advertising within the framework of the studio system during the period of *Roman Porno*.

## The restoration of the Rissho Katsuei films based on multiple materials

Principal Researcher: Manabu Ueda (Associate Professor, Faculty of Humanities, Kobe Gakuin University)  
Collaborative Researchers: Susanne Schermann (Professor, School of Law, Meiji University), Roland Domenig (Associate Professor, Faculty of Letters, Meiji Gakuin University), Fumiaki Itakura (Associate Professor, Graduate School of Intercultural Studies Department of Cultural-Interaction, Kobe University), Chie Niita (Adjunct Researcher, Waseda University Theatre Museum), Kazuto Kondo (JSPS Research Fellow PD)

### Purpose of research

This research project sought to present and environmentally restore films made by the Rissho Katsuei Film Company using related but non-film materials held by the Waseda University Theatre Museum. In collaboration with Shozo Makino's film production company, Makino Kyoiku Eiga, Rissho Katsuei was a film production company that made religious films from the late-Taisho period to the early-Showa period, but the course they charted in the history of cinema is nearly unknown. Because Rissho Katsuei was a small production company, extant materials are extremely limited, and due to restoration issues, it is essential to carry out research using multiple materials.

### Research results

First, at the Kobe Discovery Film Festival in 2018, we screened digital materials from one of the two extant rolls of *Nabekaburi Nisshin* as part of "Discovery and Research: Religion and Film" (Oct. 26, 2018, Kobe Planet Film Archive). In addition, Ueda discussed Makino Kyoiku Eiga and Rissho Katsuei, and Yulia Burenina (collaborator) discussed the Nichiren Buddhism of that time period. Also, based on the screenplay of *Nabekaburi Nisshin* (written by Saku Senoo), the original intertitles of the first film roll were collected and distributed to the attendees. The task of re-writing the intertitles based on the screenplay, including the missing portions, remains in progress so far in 2019. Next year, the intertitles will be applied to creating restored footage that incorporates still photographs.

Second, a joint investigation of Rissho Katsuei materials was undertaken. While selecting the materials to be digitized this year, we conducted an analysis of those materials to understand the production and the exhibition. There were 29 materials found related to the film *Nichiren* that made up the core of the Rissho Katsuei materials, though the joint investigation was unable to create a film despite extensive backing of Nichiren-adherent Buddhists; however, the materials found (including an unused screenplay by Yoshitake Hisa) did clarify their importance as a means to understand the background and processes of religious-film production.

In connection with the publicly selected research projects of 2018 and prior, we held an international symposium titled "Between Ideology and Show Business: Colonial/Imperial Movie Theaters and Film Culture" (Nov. 3, 2018, Korean Film Archive). To publicize results on joint research themes, the team members delivered the following research presentations: Ueda, "Manchurian Movie Theaters and Screening Tours"; Kondo, "'Movie Theaters at War': Off-screen at Wartime"; Niita, "Modernization of Japanese Movie Theaters after the Great Kanto Earthquake"; Itakura, "Censorship of Korean Films by the Ministry of Home Affairs in Imperial Japan"; and Chung (collaborator), "Between Ideology and Exhibition: Movie Theaters in Seoul from the Mid-1930s to the Early 1940s." In addition, Roland Domenig served as a discussant concerning the wartime film industry/policies.

## Visual depictions of Chinese theater and the Taisho period in Japan: focusing on Nobuyo Fukuchi's *Shina no Shibai Sukecchi-cho*

Principal Researcher: Norikazu Hirabayashi (Professor, Faculty of Political Science and Economics, Waseda University)

Collaborative Researchers: Yuan, Yingming (Professor, College of Performing and Visual Arts, Obirin University), Yoko Tamura (Professor, Faculty of Literature, Kinjo Gakuin University), Li Liwei (Associate Professor, South China Normal University), Tong Wancheng (full-time Lecturer, College of humanities, Guangzhou University)

### Purpose of research

The core of this research project, “Visual Depictions of Chinese Theater and Taisho Period Japan: Focusing on Nobuyo Fukuchi’s *Shina no Shibai Sukecchi-cho*,” is an investigation of Nobuyo Fukuchi’s *Shina no shibai sukecchi-cho*, which is a sketchbook of Chinese plays held by the Theatre Museum. It emphasizes the relationship between Chinese theater and Japan during the Taisho period, when Mei Lanfang gave two performances (1919, 1924). This research is based mainly on visual materials, with the purpose of shedding light on one facet of the period.

### Research results

Research activities in 2018 included the three areas listed below, as are the results either already obtained or those that are expected to be obtained.

#### (1) Investigation work on Nobuyo Fukuchi’s *Shina no shibai sukecchi-cho*

Prior to the initiation of the research project, the Theatre Museum had already put all materials related to the sketchbook into a database, and the text written in each sketch had been fully reprinted. As part of research activities beginning in 2018, the reprinted content was referenced against materials such as performance advertisements in contemporary periodicals such as *Shuntian shibao*, *Chenbao*, and *Shenbao*, and an investigation was conducted to determine the extent to which the content was accurate. These contemporary materials provided support for particular details of plays that Fukuchi witnessed at the time.

#### (2) Study of Nobuyo Fukuchi

In addition to drawing the sketchbook in China,

Fukuchi actively supported the 1919 Japanese performance by Mei Lanfang, and adapted the *Kun* opera *Sifan*, which was often performed during that period by Mei Lanfang, transforming it into a symbolic work of new dance (Shin-buyo). With regard to the new dance version of *Sifan*, research team member Li Liwei gave a Chinese language research report titled “The Transmission and Reception of *Sifan* in Japan: With a Secondary Emphasis on the Influence of the Japanese Performances of Mei Lanfang.” Studies using materials held by the museum other than the sketchbook clarified details concerning the creation of the new dance version of *Sifan* for the first time.

Together with the Shanghai Kun Opera Troupe, which visited Japan in October 2018, we hosted a lecture and performance called “100 Years of Kun Opera and Japan,” featuring a special performance of *Qintiao* by the troupe, which was part of the original 1919 performance, to aid attendees’ understanding of the Chinese plays Fukuchi attended around that time.

#### (3) Study of Taisho period visual materials on Chinese theater

When Nobuyo Fukuchi drew the sketchbook, a large quantity of visual materials that also depicted Chinese theater, such as sketches, paintings, photographs, and carvings, was in circulation. With regard to such aspects of the contemporary cultural environment within which Fukuchi drew the sketchbook, research team members Yuan Yingming, Takashi Sasaki, Li Liwei, and Norikazu Hirabayashi will each present results at the Academic Symposium to Commemorate the 100<sup>th</sup> Anniversary of Mei Lanfang’s Japanese Performance, which will be held in Beijing on Jan. 26, 2019.

編集：柴田康太郎 小松加奈

翻訳：カクタス・コミュニケーションズ株式会社

発行者：文部科学省「共同利用・共同研究拠点」

早稲田大学演劇博物館演劇映像学連携研究拠点

拠点代表：岡室美奈子

早稲田大学演劇映像学連携研究拠点

〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1-6-1 早稲田大学早稲田キャンパス6号館

TEL：03-5286-1829 URL：http://www.waseda.jp/prj-kyodo-enpaku/

Edited by: Kotaro Shibata, Kana Komatsu

Translated by: Cactus Communications

Published by: Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology-Japan

“Joint Usage/Research Center”, Collaborative Research Center for Theatre and Film Arts, Theatre Museum, Waseda University

Center Leader: Minako Okamuro

Collaborative Research Center for Theatre and Film Arts, Waseda University

Building 6, Waseda Campus, Waseda University, 1-6-1 Nishi-Waseda, Shinjuku-ku, Tokyo, 169-8050

(+81)3-5286-1829 URL: http://www.waseda.jp/prj-kyodo-enpaku/